

1

国語科(中)

国中平27

(注意) 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

毎年十一月に入ると、山のほうからパーンパーンと音が響いてきます。イノシシ^{りよう}の銃声^{じゆうせい}です。今では慣れましたが、引越してきた年に初めてこの音を聞いたときは、「ええっ? なにがあつたの?」とほんとうにびっくりしました。イノシシ^{りよう}が始まったのだと聞いて納得したのですが、ナマで銃声を聞いたのは生まれて初めて。それに、まさか家にいてその音を聞くなどとは思ひもよらなかったのです。そんなことがあつてからしばらくして、気候がよかつたのであちこちを歩き回っていたところ、河原で私と同じくらいの年頃^{としごろ}の一人の女性と出会いました。見れば彼女の足元には大きな赤い肉の塊^{かたまり}——頭と手足は切り落とされて、皮も引かれていて、どこから見ても特大の肉の塊としか言いようがありません。血抜きもされていて、臭^{にお}いはまったくしないのですが、なにしろそんな大きな生肉を見たのは生まれて初めてだったので、①衝撃^{しやうげき}でした。けれどもそこで、持ち前の好奇心^{こうきしん}がむくむくと湧いてきました。

「これはなんの肉ですか?」

「イノシシですよ」

一頭分のイノシシを大きな肉切り包丁で切り分けているところだったのです。私は食わず嫌^{ぎず}いでイノシシ肉を食べたことがなかったので、思い切^なって尋ねてみました。

「イノシシの肉は臭いという方がおられますが、臭みはありますか?」

「なにを食べていたのかによって、臭いも肉質も違います。この辺りのイノシシはキノコを食べているので臭みはないですし、肉も軟^{やわ}らかいですよ」

彼女から話を聞いているうちに、せっかくイノシシ^{りよう}のサ^aカ^{かん}んな土地に住んでいるのだから、一度はイノシシの肉を食べてみようと思い始めていました。

「私は食べたことがないんです。どこへ行ったら食べられます?」

「へえ、初めてなんや。それやったら、ちよつと遠いけど、安心できる店で食べたほうがいいよ」

そう言つて、一軒^{けん}のイノシシ料理を出しているお店を教えてくれたのでした。

彼女と別れて帰る道すがら、私は不思議な感覚に襲^{おそ}われていました。田舎暮らしをすると決めてから、「田舎に行ったら、自給自足生活がしたいわ」とよく口にしていました。引越してきてからも、ちよこつと野菜作りをして、その真似事^{まねごと}のようなことをやってきました。

でもイノシシ^{りよう}の銃声を間近で聞き、肉を解体している現場に居合わせたことで、「ほんとうの自給自足」生活とはこういうことをいうのだと、②自分の甘さ^{あま}を突きつけたられた思いでした。彼女の作業が荒々しいという理由ではなく、地に足がついた生活ぶりに、「すごいな」と敬服させられたのです。

さつそく、教えられた店に電話で予約を入れ、週末に主人と悠^{はるか}と三人でイノシシ鍋^{なべ}を食べに行きました。店は高速道路から少し外れた山のなかにありました。

運ばれてきたイノシシの薄切り肉は、「ボタン」の別名があるように濃いピンク色をしていて、脂^{あぶら}が乗っています。昔は「脂っぽそうだから」とケイエン^bしていたのに、今は逆に食欲をそえられるから不思議です。実際、このお鍋のおいしいことと云つたら! どうしてこれまで食べなかったのだらうと残念で仕方がないほどでした。最後に、白いご飯の上に産みだての有精卵^{ゆうせいらん}と、鍋に残った味噌^{みそ}だしをかけていただくのです。これがもう絶品。こくのあるイノシシのだしを最後まで食べきつてしまいました。

おそらく、河原であの女性に出会っていなかったら、私は今もイノシシの肉は食わず嫌いのままだったでしょう。私が食べてみたいと思つたのは、彼女の作業姿勢にありました。大きな肉の塊を大事に、ていねいに扱^{あつか}う姿を見ているうちに、「いのちをいただく」ということは、こういうことなのだと感じたからでした。

子どものころ、祖母から「無益な殺生^{せうじやう}をしたらあかん」と聞かされました。草むらで見つけた大きなカマキリが怖くて、木の枝で邪険^{じゃけん}に振り払おうとしたときなど、決まってその言葉が飛び出したものです。

大人になってからは、無益な殺生がある一方で、「有益な殺生」というものもあるのだということを知ったつもりでした。ただ、それは現実感がなく、あくまで頭の中だけのことだったのです。河原でイノシシ肉を解体する女性に出会って初めて、私は「これが有益な殺生だ」と実感できたのでした。

イノシシに限らず、ニワトリでも豚^{ぶた}でも牛でも、私たちは「殺生」をして、お腹^{なか}におさめています。解体の現場を目にすることはまったく言っていないではありませんが、自分の手にかけていないだけで、だれかが代わりにその作業を担^{にな}つてくれているのです。

そうして私たちは、ステーキ用やしやぶしやぶ用、トンカツ用など、用途^{ようど}に応じてさまざまな切りに分けられた③きれいな「お肉」を購入^{かうにゅう}することができず。調理されて食卓^{しょくたく}に上つたそれらは、私たちの血や肉となるほか、体内でさまざまな働きをして健康をささえてくれています。けれども、スーパーでパック詰めされた肉を手にしたとき、失われた「いのち」に思いをはせる人はほとんどいないでしょう。少なくとも私は考えたことはありませんでした。

あの女性がていねいに作業をしていたのは、おそらく④「殺生」への思いがあつたからでしょう。目の前のいのちを有益にいただくために、捨てる部分がないよう大切に扱う。最後の一切れまで無駄^{むだ}にしない——その姿勢に、尊^{いけい}いいのちへの畏敬^{けい}の念がにじみ出ていたように思うのです。

私たちはなんでもかんでも出来合いのものを買うことに慣れすぎて、それがどういうカ^cテイ^{てい}を経て私たちのところまできているのかを考えなくなっています。その結果、まだ十分食べられるものであつても、「賞味期限が過ぎたから」と捨てることに無頓着^{むとんちゃく}でいられます。そこまできなくて、安い豚のこま切れはもろろんのこと、たとえ一〇グラム一万円のステーキ肉であつたとしても、いのちをいただいているのだという感覚にはなりません。

とくに、シヨウヒ^d社会の真^まっ只中^{ただなか}に生まれてきた若い人たちは、生まれたときから「買う」ことが当たり前すぎて、ものを大事にしない傾向があるようです。飽きてしまったから、気に入らないから、と新しいものを買ってしまふ。けれども、そんなふうになだんからものを粗末^{そまつ}にしてばかりいると、どんなものでも「買えばいい」という感覚に陥^{おち}つてしまいます。極端^{きょくたん}な話、いのちだつて買えると錯覚^{さくかく}しかねないのです。

数年前、ある小学校で起きた話です。クラスのみんなでニワトリを飼って食べる授業を予定していたところ、一部の保護者から批判が出て、結局、授業は中止になりました。「昔は家で飼っていたニワトリをさばいて食べていた」などと、賛成する保護者もいたようですが、「子どもたちがかわいがって育てたニワトリをわざわざ殺して食べさせることで、ショックを受ける子が出てくるだろう。その※1 ケアはどうするのか」などの声があがったようなんです。

たしかに、毎日一所懸命えさや水をやり、世話をしてきたニワトリの首を落として血抜きをし、羽をむしって臓物をとり、解体することを考えたとき、だれもが「フクザツ」な気持ちになることでしょう。「残酷だ」と受け止める子どもが出てくることもわかります。けれども※2 ベジタリアンは別にして、たいていの人は牛肉も豚肉も鶏肉も食べているのです。現実にはだれかが、作業を肩代わりしてくれているのに、その場面を見せなければそれでいいのでしょうか。

もしも私が保護者なら、そうした授業は大歓迎です。愛情をかけて育てたニワトリを食べることで、⑤ 子どもたちの心には葛藤が生じることでしょう。でも、毎日、自分たちが「おいしい」と口しているお肉は、実はだれかがさばいてくれていることや、人間は生きるために家畜のいのちを奪っていること、その大切ないのちだからこそ余すことなくお腹におさめなくてはいけないことなど、多くのことを学ぶことができます。「いのち」について深く考えることができるのです。

この地に引越してきてから、私は自分で魚をおろすようになりました。大阪に住んでいたころは「薄づくりにして」「三枚におろして」などと魚屋さんにお願ひすればよかったのですが、こちらでは一匹のまま買って帰って家でおろすのが普通なのです。本を読んで魚のおろし方を勉強し、名入りの包丁をあつらえて挑戦しているうちに、一通りのことはできるようになりました。

うるこを引き、まな板に魚を載せて頭を落したり、骨を外したりという一連の作業をするとき、私は悠を子ども用の椅子に座らせて傍らに置き、一部始終を見させています。そのとき必ず口になっているのが、「お魚さんのいのちを食べさせていたくんだよ。お魚さん、ありがとう。残らず食べさせていただきますね」という言葉。祖母が教えてくれた数々の言葉が幼い私の体にしみ込んでいたおかげで、大人になってから「ああ、おばあちゃんはこのいうことを言ってたんや」と理解できました。⑥ 悠もまた、いつか私が発した言葉の意味に気づいてくれると思うからです。

〔語注〕※1「ケア」：世話。手当て。

※2「ベジタリアン」：菜食主義者。

〔大平光代『陽だまりの時間』／一部原文を変更しています。〕

問一 波線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

a サカ（んな）

b ケイエン

c カテイ

d ショウヒ

e フクザツ

問二 傍線部①「衝撃でした」とありますが、この内容の説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 初めて聞く銃声に何が起こったのかと頭が混乱した。

イ 女性が自分だけで血抜きをしていたことに感動した。

ウ 目の前にある大きな生肉が何の肉かと興味が湧いた。

エ 生き物そのままの大きな肉があることに気が動転した。

問三 傍線部②「自分の甘さを突きつけられた思いでした」とありますが、この説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女性がイノシシを上手に切り分けた姿を見て、自分は自給自足の生活がしたくて田舎にいたが、自分には自給自足の暮らしをこなすことができないことに気づいて苦しんだ。

イ 女性がイノシシを豪快に切り分けた姿を見て、自分は田舎暮らしのためだけに山の中で生活しているのに、イノシシ猟ぐらいで驚いてしまっていることに気づいて情けなく思った。

ウ 女性がイノシシを自らの手で切り分けた姿を見て、自分は自給自足の田舎暮らしをしているつもりだったのに、実際にはほど遠いものでしかなかったことに気づいて恥ずかしくなった。

エ 女性がイノシシを手際よく切り分けた姿を見て、自分は祖母から学んだ田舎暮らしで充実しているつもりだったが、自分の生活はただの真似事でしかないことに気づいて落ちこんだ。

問四 傍線部③「きれいな『お肉』」とありますが、これはどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 体にとっては健康的であるが、店の人がきれいに処理することで、おいしい部分がなくなってしまう肉。

イ 用途が分かっている使いやすいが、だれかが切り分けてくれているために、料理の腕を鈍らせてしまう肉。

ウ きれいに詰められているが、さばいた人の技術によって、見た目の悪い部分が見えなくなってしまう肉。

エ きれいにさばかれているが、他の人によってさばかれたために、もともとの命を感じることのできない肉。

問五 傍線部④「『殺生』への思い」とありますが、この思いを説明した部分を本文中から十一字で抜き出しなさい。

問六 傍線部⑤「子どもたちの心には葛藤が生じることでしょう」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちとともに生きてきたニワトリを食べなければならないのか、食べないで生かすべきではないのかと思悩むということ。

イ 自分たちが愛情をかけて育ててきたニワトリを食べる悲しみによって、もう二度といのちを奪ったりしないと決意するということ。

ウ 自分たちがわざわざ育ててきたニワトリを殺すことは、自分の将来にとって良いことなのか悪いことなのかと考えるということ。

エ 自分たちは苦勞しながらニワトリを育ててきたのに、さばくのも自分たちでしななければならないのかと不満に思うということ。

問七 傍線部⑥「悠もまた、いつか私が発した言葉の意味に気づいてくれると思うからです」とありますが、「わたしが発した言葉の意味」を五十字以内で説明しなさい。なお、句読点も一字として数えます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「おれ」は大代台高校（通称「ダイダイダイ」）野球部に、ほかの一年生に遅れて、才能のある三塁手の「ミスター」といっしょに入部したピッチャーの青居礼文（通称「レブン」）である。速球に威力があり、自信を持つている。「ゴキゲン」は野球部の監督で、独自の理論を持つ。「ハカセ」、「オケラ」、「ペイジ」は先に入部していた高校一年生メンバーである。

猛ミーティング。おれなど、もういいじゃねえかと思ってしまうくらいにゴキゲンはしつこい。※¹のうが能書き重視。「納得していないことを練習しても身にならない」とゴキゲンは言う。だけど納得しなくても、見切り発車で練習して、あとで納得したって結果は変わらないように思える。

「ゴキゲンはずいぶんマシだぜ。基本的には部員に任せてる」
「それは分かるよ……」

ハカセがつぶやくように言った。

「ゴキゲン理論はそれほど※²奇をてらっているわけじゃない。レブンへのアドバイスは『どまんなか！』だろ。かけひきなしの真っ向勝負だ。そういう感覚がだんだん分かってきた。おれもゴキゲンに共感する部分がある。野球は道具を使うスポーツってやつ。剣道に近いって言っただろ。なるほどと思うよ。でも、だったら武道のように、自分の精神性を高めるような厳しい練習も必要じゃないか」

みんなが黙った。それは各々が感じていることだ。だから※³アフター練習で息をはずませている。

「まさか、おれたちに※⁴そのことを気づかせるために、a ボウニンしてるのかな」

オケラが言う。ミスターが即座に右手と首を横に振った。

「あのオッサン、そんなに深く考えてへんわ。おれはこう思うで。野球ってのはいろいろな※⁴セオリーや小難しい戦術があるけど、できるだけシンプルに考えて、思いきりプレーを楽しめと。その程度やろ」

ミスターは※²偽悪的に言うが、それはそれで正しいだろう。

はい、とペイジが右手を挙げた。

「二人が入ったところに話してたことなだけどさ。いい機会だから言うぞ」

ペイジがおれとミスターを指差した。

「みんな、ハカセと同じように思ってた。弱くたっていい。しっかりと練習して胸を張って試合に出る。そういうことでもいいんじゃないかって。おれもそう思って野球部に入った。勝てなくなつて、日本中の高校球児たちとつながることができないじゃないか。そこにレブンが入ってきた」

おれは？ とミスター。ミスターもだ、とペイジ。

「レブンのピッチングを見て、こりゃいける、とみんなが思ったんだ。今の三年生も、ゴキゲンも、みんなそう思った。そんなタイミングで、ゴキゲン理論がすつと入ってきた。そういうことなんだと思うよ」

そういうことなのだろう。ゴキゲンが監督になったときには、デカさんたちは二年。その上に三年生がいた。すぐにはチーム改革に取り組めなかった。デカさんたちのチームになって、おれとミスターが加わり、ゴキゲンは勝てるチーム作りに、チヤクシユしたのだ。

ペイジに面と向かって言われて照れくさかった。だが※³事実を直視するべきだ。過大評価もいけないが、過小評価もいけない。現に大代台高は久しぶりに勝利を挙げた。それはおれの力によるところが大きい。

「そこで、初勝利を挙げたことだし、c ティアンがあるんだ」

ハカセが言った。

「アーリーワークをやるう」

「アーリーワーク？」

「朝練だ」

ハカセはうなずいた。

「みんな、いまの練習に何かが足りないと思ってるね。高校野球はそんなに甘いもんじゃないってね。勝てるチームになりそうだけど、このままじゃ勝ちぬけるわけがないとも思ってる。そう思っていて、レブンの速球とゴキゲン理論に寄りかかったままっていうのは怠慢じゃないか。おれたちが自主的にアーリーワークをやるんなら、ゴキゲンは文句言わないだろう」

「具体的なイメージ、持つとるんか」

ミスターが言った。

うん、とハカセがうなずく。

「ダッシュを中心に、※⁵ファンダメンタルな力をつけるんだ」
本練習はトスバッティングと守備の連係、打撃練習が中心で、みなでダッシュをくりかえすといったメニューは※⁶割愛されている。

「ファンダメンタルは各人でやれ、ってゴキゲンは言うだろ。だけどさ。漫画とかで、主人公が隠れて努力するじゃないか。あれ、努力してることをだれかに知ってほしいよな」

そうそう、とみなが言う。

「なにも隠れてやる必要はない。みんなでやればいいじゃないか」

反論はない。ハカセのティアンは理論的で熱く、前向きだ。それをめんどくさいとかつらいとか眠いとか、そういう理由で否定することは意地でもできない。

※⁴しかし――。

「でも、おれはいまの練習で力を使いきってる。毎日が充実してるよ。※⁵メリハリがあつて、授業も集中できる。そこに朝練が入ってくるとどうかな、って正直思う。授業中、居眠りするかもしれない。前の日の練習の疲れが取りきれないうちに朝練で走って、そのままメリハリなく本練習に突入する……これは逆効果じゃないかな」

オケラが言った。

ハカセが即座に首を横に振る。

「そこをやるんだよ。絶対居眠りなんかしないんだ。プライドを持って授業に臨むんだ。むしろ逆かもしれないぜ。朝のダッシュで身体が温まって、案外集中できるかもしれない。やってみなきゃ分らないじゃないか」

問題は午後の二コマだな、とペイジが言った。弁当を食べたあとの五、六時限目は睡魔との戦いでもある。

「この前の試合、やっぱりファンダメンタルが足りないと思ったよ。外野にライナーが飛ばなかったじゃないか。ランニングのフォームも、なんか安定感がない。身体に力がないんだ。それはたぶん基礎練習が少ないせいだ」

うん、とオケラがうなずく。

うちのチームだけでなく、高校野球の試合では、力のある打球が外野に飛ぶシーンは少ない。いくら金属バット使用でも、いいピッチャーの球威にはたいていの打者が力負けしてしまう。

「ゴキゲン理論はバント廃止だろ。だったらなおさら身体のパワーが必要だ。バントはしない、長打は出ない、っていうんじゃ、これはダメだよ。いい当たりのライナーを外野へ打ちかえすためには、ファンダメンタルな練習が絶対に必要なんだ」

「レブンはどう思う？」
オケラが言った。

今でも朝六時半に玄関を飛び出し、ホームルームにぎりぎり間に合うくらいなんだから、七時半に朝練をはじめるとすると、五時台には家を出なくてはいけない。いや、本格的な全体練習ならば七時開始くらいか。すると家を出るのは……。

「レブン、何時に出ればええねん。眠る時間がなくなつてまうで」

ミスターがダイベンしてくれた。

そりゃキツイよな、とオケラがつぶやく。ハカセは腕を組んでおれを見ている。

「やろう」

軽い口調でそのひと言が出た。

⑥ 朝早いのがつらいなんて、死んでも言えるもんか。

「レブンがいいなら……アーリーワークやろうか」

オケラが言つて、ハカセが満足そうにうなずいた。

やろう、やろう、とみなが言う。よつしや、とミスターが言った。

「ほな、やつたろうか。眠らんでもしんどくないくらい楽しめばええんや。小学生のころの夏休みを考えてみいや。どんなに早う起きたつて、一日中遊べたやろ。疲れ知らずや。ダイダイダイでの短い野球生活は夏休みといつしよなんや」

野球部生活の夏休み化。さすがはミスター、面白いことを言う。

「な。そうやろ。おれも自分でもいいこと言うな思つたで。高校生活だけやない。一生を夏休み化できたら、こりや、最強の人生やで！

そのシタジをダイダイダイで作るんや」

「永遠の夏休み計画！」

ペイジが叫び、みんなが顔を上げて笑つた。まったくミスターの調子のよさといつたら！

〔語注〕※1「能書き」……どのような効能があるかという説明書。

※3「アフター練習」……全体練習後におこなう自主練習。

※5「ファンダメンタルな」……基本的な。

※2「奇をてらつてゐる」……変わったことをして人の気を引く。

※4「セオリー」……理論。

※6「割愛されている」……惜しいと思うものを手放す。

(須藤靖貴『どまんなか』)

問一 波線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ホウニン

b チャクシュ

c テイアン

d ダイベン

e シタジ

問二 傍線部①「そのこと」とありますが、どういうことをさしていますか。その内容として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 剣道の竹刀の素振りを野球の練習に取り入れることが大切だということ。

イ 野球の練習をみんなで楽しむことでチームがまとまることが大切だということ。

ウ 全体での練習のあとで自主的に打撃練習をすることが大切だということ。

エ これまでよりも精神性を高めるような厳しい練習をすることが大切だということ。

問三 傍線部②「偽悪的にいうが」とありますが、ここでの意味として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 心から憎んで言うけれど

イ 悪ぶって言うけれど

ウ 悪人だと決めつけて言うけれど

エ 本当は良くないと思つて言うけれど

問四 傍線部③「事実を直視するべきだ」とありますが、「事実」の内容として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「おれ」の入部によって大代台高校が勝てるチームになったという事実。

イ 「おれ」の入部によって部員の間に安心感がめばえたという事実。

ウ 「おれ」の入部によってチームに活気が出てきたという事実。

エ 「おれ」の入部によってゴキゲン部員数を確保できたという事実。

問五 傍線部④「しかし——」とありますが、この部分は誰の心を表していますか。答えなさい。

問六 傍線部⑤「メリハリがあつて」の内容の説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 練習で力を使い切つてしまっているが、逆にそれによって心地よく感じられること。

イ 練習で力を使い切つているために、もう練習をしなくなつて、授業に心が向かうこと。

ウ 練習で力を使い切つてしまっているが、そのあとは授業だというように、気持ちを切り替えられること。

エ 練習で力を使い切つているために、授業はどうでもいいといった投げやりな気持ちになること。

問七 傍線部⑥「朝早いのがつらいなんて、死んでも言えるもんか」とありますが、これはどういうことですか。七十字以内で説明しなさい。

問八 本文中に登場する主要な人物の説明としてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ミスター」は三塁手として才能があり、一年生部員の中心的存在としてチームに活気を与えられている。

イ 「ゴキゲン」は独自の理論によって野球部員たち全体の信頼を得て、チームを全国大会に導こうと懸命になっている。

ウ 「ハカセ」は論理的に物事を考え、説得力もあることから、一年生部員全員に一目置かれる存在となっている。

エ 「おれ」はピッチャーとしての才能に恵まれ、期待されているだけにプレッシャーも大きい、やる気をもっている。

③ 次の文章は、古谷綱武^{ふるやつなたけ}という人の自伝です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

両親は私だけを残して、弟妹たちをつれて、遠い外国の任地に行った。中学生になった私は東京を離れて宇和島^{うわじま}のおじさんの家に預けられた。まもなくおじさんは病氣^{りやうぢ}療養^{りやうぢ}で宇和島を離れ、私は中学校の寄宿舎^{りやうしや}（寮）に入ることになった。小学生の時にキリスト教会の日曜学校に通わせられていた私は、さびしい日曜日には、この地の日曜学校へ行ってみようと思いついた。そこで、松本良之助^{りやうのすけ}先生と出会った。

クリスマスがやってきた。おとなたちも子どもたちもいっしょになって、教会で一日の催し^{もてなし}をして過ごすのであった。宗教性を加えて学芸会とお祭り^{おまつり}とを一つにしたような催しであった。松本先生は私に、なぜ教会に来るようになったか、ということをも十分間ぐらい話せるようにまとめて、① クリスマスにみんなの前で話せと言われた。私のように、誰からも誘われ^{さそ}ないのに、自分から教会にやって来たという人は、よほど珍しかったらしいのである。

私は、先生に指名されて今の身の上と日曜学校に行ってみようと思った気持ちを、クリスマスの日にみんなの前で、ありのままに話したのであった。その話を聞いていた信者のおばさんの一人が、日曜学校に来るときに洗濯物^{せんたくもの}を持ってきなさい、次の日曜日までに洗って持ってきてあげる、と言ってくださった。私は、そういう他人のいることを初めて知って、自分の生きていける世界が急に広くなったような気持ちになった。そのクリスマスの日には、私は頼まれた訳ではなかったが、後に残って、後片づけも手伝った。

松本先生が私のそばに近づいて来られた。

「フルヤさん、冬休みには、東京のご親類の家にでも行きなはるのかな」

「行きません。寄宿舎で、休みでもいてよいと言われました」

「そうかな。いつから休みかなあ」

「今日からです」

「そうか、それじゃな、明日、わしの家に遊びに来んかな。——あ、フルヤさんは、わしの家、知らなんだな。元結掛^{もつといぎ}は知つとんなはるか」

先生は、宇和島の町名をあげて、そう言われた。

「知っています」

「それじゃな、元結掛にきて、どこの家でもええ、松本の家はどこかと聞いてやんなはい。誰でも知ってるからな」

「それでは、あす午後になつてから、伺^{うかが}います」

「待つとらい」

私はもう前から、先生とゆつくり話がしてみたいと思っていた。午前に行ったら、すぐお昼ご飯の時間になる。迷惑^{めいわく}をかけないように、その時間の前に帰らなければならない。午後に行つた方が、先生と長い時間話していられると思つたのである。

私は、先生が、自分の家に遊びに来いと言つてくださる日を、ほんとうに待つていた。

② その日が来たのである。

なにか、新しい人生が、全くの新しい人生が、私の前に始まろうとしているような、ある期待と、ある予感とが、私の心の中にうごくのであった。

郵便局によつて、両親あての外国郵便を出した。その足で元結掛へ向かつた。松本先生の家は、すぐにわかつた。

しかし、教えられた家へ行つてみると、そこは傘屋さんの店であつた。傘屋さんといつても、今の洋傘屋ではない。竹の骨を組んで油紙をはつて作る昔の日本の傘である。店では二人の職人さんが、傘作りをしていた。傘を作るところは見たことがなかつたので、珍しかった。いつまでも見ていたいような珍しさであつた。できあがつた傘は、お客によく見えるように、陳列棚^{ちんれいばな}に並べてあつた。製造販売^{せいぞうはんばい}の店である。

しかし、私はなんだか、意外な感じがした。

（ここが、本当に先生の家なのだろうか。私は家を聞き違えたのではなからうか）

「ちよつと伺います。ここは松本先生のお宅でしょうか」

「おんなはらい（おられますという意味）。この店の中通つてな、ずっと奥^{おく}にいつてやんなはい」

職人さんは、笑顔^{えがほ}をして私にそういつて下さつた。それから奥に向かつて、大きな声で、「お人が見えましたぜ」とどなつた。学生さんだよ、などと言わないで、お人が見えたという言い方が、とても感じのいい言葉に聞こえた。私はそれを自分の言葉にして、今も使っている。

この店の奥にもう一軒、別棟^{べつどう}の家があつた。

「お人が見えましたぜ」という職人さんの大きい声で、その別棟の家の開けっ放しの玄関から、松本先生が下駄^{げた}をつつかけて出て来られるのが見えた。私は奥に声をかけてくださった職人さんに、ありがとうございました、とお辞儀^{じぎ}をして、店の土間を通り抜けて入つていった。

「よう来なはつたなあ、待つとつたい、さあ、あがつてやんなはいや」

先生は、私を導いていくような身ぶりで、先に立つて、いま出て来た家の方に引き返された。私はその後についていった。

先生の家は、玄関からまる見えの三部屋だけの家であつた。奥の一番広い座敷^{ざしき}に、私を通してくださった。

私はその部屋で、先生と日暮れまで向かい合つていたのである。

それでも、先生とともに過ごしたこの半日は、その話が十分にわかつたとはいえなくても、私には、今までまったく知らなかつた強い刺激^{しげき}を心に受けた日であつた。

ものごとを思つてみるとか、考えてみるとかということは、まったく知らなかつた私は、その日の先生のお話から漠然^{ばくぜん}とはあるが、人には人の心の世界、人の心の生活というものがあることも、あるずつしりとした重さをもつて、感じさせられたのである。今まで知らなかつた人生というものに、ふれた思いがしたのである。先生の言葉は、私の心の扉^{とびら}を初めて叩^{たた}いて下さつた声とも聞こえたのである。私は、十分にはわからなかつた先生のお話に、深い魅力^{みりよく}を感じた。自分もものを思う人間になりたい。自分もものを考える人間になりたい。

私は③ 今まで知らなかつた人の生き方を知つたような気持ちになつて、そう思つたのである。

先生は、晩ご飯を食べていくようにと、おっしゃつて下さつた。しかし、はじめてのお家に来て食事までごちそうになるのは、礼儀^{れいぎ}を知らな

いことだと私は思った。それに、寄宿舎の炊事のおばさんが、私の食事を作って待って下さっている。

私は、今までこんなに丁寧な気持ちになったことはなかったように、言葉に深く心をこめて、

「今日は、先生、本当に、ありがとうございます」

と帰りしなの挨拶をした。先生は、

「ちよつと、待ちなはいや」

とおっしゃって、座敷の隅にあつた本棚の前へ行かれた。そして一冊の本を抜いて来られると、

「フルヤさん、あんた、本を読んでみなはるかな」

とおっしゃった。私は、その本がどんな本なのかはわからなかったが、わからなくても飛びつくようにして、

「先生、読ませて下さい」

と力をこめていった。先生はその私の答えに満足なさったようであつた。「返すのはいつでもいいからな」と、やさしいほほえみ顔をなさつて、その本を私に手渡し下さった。

先生は店のところまで、送って出て来て下さった。私は外に出ると、すぐにその本の題を見た。

「耶蘇」という題の本であつた。

耶蘇はキリストのことだということは知っていた。キリストのことは、日曜学校や宣教師でのお話しで、おおよそは知っていた。

その本の著者は、武者小路実篤という人であつた。その日まで私は、本というものは一冊も読んだことがなかった。武者小路実篤とはどういう人なのか、その名前さえも私は知らなかった。随分変わった苗字だと思つたりした。

私は帰る途中で、炊事場のおばさんに、一錢饅頭五個をお土産に買った。私は寄宿舎に帰って晩ご飯を済ませると、すぐに自分の部屋に帰った。※監の先生は今日郷里に帰られたと、炊事のおばさんが話しておられた。消灯はいつも九時である。しかし今夜は電氣をつけっぱなしにしていても、叱られることはないと思つたりした。

部屋は寒かつた。私はすぐに布団を敷いて、寝巻になつて毛布の間にもぐりこんだ。からだはすぐにあたたまつた。

私は先生から借りてきた本を、布団の中で開いた。第一ページから読み始めた。④本というものを初めて読むということに、私はある興奮を感じた。

ページが進むにつれて、次第に引き入れられていった。分りにくいところもあつたが、よく分かるところがたくさんあつた。日曜学校や教会で知っていたキリストとは、随分違つていた。キリスト一人を取り上げて、こんないろいろなことを考えているその人の心の世界の広さ深さにも驚いた。またそれが、心をひき入れてくれるおもしろさでもあつた。

今思えば、随分乱暴な読み方をしたのである。私は夜明け近くまでかかつて、その本を一夜で読み上げてしまつたのである。読み終わつても、今まで知らなかつたような興奮で、眼がさえてなかなか眠れなかつた。私は、もうずうつと前から、本を読んだり、ものごとを考えたりしたかつたのだ、とそんなことも思つたりしたのである。

(古谷綱武『人生への旅立ち』／一部原文を変更しています。)

〔語注〕※「舎監」：寄宿舎での生活を監督する人。

問一 傍線部①「クリスマスにみんなの前で話せと言われた」とありますが、みんなの前で話した結果、「私」にはどのような変化が起こりましたか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分を思いやつてくれる他人がいることを初めて知って、自分の生きていくことができる世界が急に広がったと感じた。

イ 次の日曜日までに洗つてきてあげるから、今度来るときに洗濯物を持つてきなさいと信者の方々が声をかけてくれるようになった。

ウ 私だけを残して遠い外国の任地に向いて行った両親を恋しいと思う気持ちが急にのつてきていつそうつらくなつた。

エ 周りの方々から同情され声をかけられて、帰省する家がなくなつてさびしい私は、話さなければ良かつたと後悔した。

問二 傍線部②「その日が来たのである」とありますが、この時、「私」はどのような気持ちだと考えられますか。次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 日曜学校で松本先生や宣教師の話を聞いて、キリストの生涯に感動して、自分も行動する人になりたいという気持ち。

イ 家族ははるか遠い外国へ行つてしまつて、さびしい思いで続けている寄宿生活から解放されたいという気持ち。

ウ 私の知り得ないことが起こるかもしれないと思うと、期待感が膨らんでわくわくせずにはいられないという気持ち。

エ 先生と長い時間話してられる午後を訪ねていつて、先生と世間話をたくさんして満足感に浸りたいという気持ち。

問三 傍線部③「今まで知らなかつた人の生き方」とありますが、どのような生き方ですか。「」内の文章を参考にして三十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部④「本というものを初めて読むということに、私はある興奮を感じた」とありますが、どういうことですか。次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 貧しく、弱く、病む者に救済の手を差し伸べるキリストの心の広さ深さを知つて、心が引きつけられる思いが深まつた。

イ 本を読むのがうれしくてたまらず、作者の心の世界の広さ深さが私の心を引き入れてくれるおもしろさがあつた。

ウ その本の内容は、教会で聞いたキリストとは随分違つていて、どちらが本当なのだろうかと思議に思いながら読んだ。

エ 変わった苗字の作者に興味をもつて読み進めていつたが、日曜学校の先生の話と似通つており、おもしろく読むことができた。

問五 本文の内容と合うものを次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 先生から借りた本の内容は、日曜学校でキリストについて聞いていたのと、ほとんど同じ内容だったので興味深く読むことができた。

イ クリスマスの日に日曜学校で身の上話をして、他の人から優しくしてもらつていてという内容の手紙を外国の両親の所へ送つた。

ウ 先生から本を渡された私は、その本の内容が全く分からなかつたので気が進まなかつたが、先生に悪いと思つて本を借りた。

エ 先生の話は理解しにくいところもあつたが、心を引きつけて夢中にさせる不思議な力を感じて、私には忘れられないものとなつた。

国語科(中)

国中平
27

解答用紙

受験番号の記入欄は左端にあるので、忘れないこと。

	→	a	(ん な)	b	c	d	e
--	---	---	------------------	---	---	---	---

七			六	五	四	三	二	一	
								a	
								(んな)	
								b	
								c	
								d	
								e	

[illegible][illegible]

受驗番号